TOPICS　　ネパール交換研修生派遣プログラム 2016 に参加して

ネパール交換研修生派遣プログラム(2016 年 12 月 21 日から 29 日)に、通信制課程から 2 名の学生が参加し貴重な経験をしました。

「ネパール派遣研修を終えて」

通信制課程　2 年生　橘　由紀

　阪神淡路大震災の被災者でもある私は、准看護師として病院勤務もしています。発展途上国とは？衛生管理は？昨年の地震の復興状況は？など、とても興味深かったので研修に参加しました。ネパールでは少なからずカースト制度が残っており、貧富の差があり、至る所に物乞いがいます。街中は、復興途中で建築中や、道は舗装している所が少なく、埃が舞いマスクをしての活動でした。そして、今なお被災者のテント暮らしをしている方々もいます。日本はすぐに復興し、物に溢れ食にも困らない生活に戻られました。しかし、ネパールは物資も少なく、栄養状態も悪い。一言で発展途上国と聞いていても、実際に五感を通じて目にした光景は想像以上でした。各国からの色々な支援で少しずつ町の環境は変わっては来ています。

しかし、自分自身において、自国を愛し、そして家族を愛す心は負けている様にも感じました。物はなくとも、ダンスを通じて心と心が通い、笑顔が絶えないネパールの人々を見て、心が豊かであれば幸せであると教えられました。

「ネパール派遣研修に参加して」

通信制課程　2 年生　藤井 絵理奈

私がネパール研修に応募した動機は、ネパールなどの途上国において、どのような看護が求められているのか、実際に目で見て確かめたかったからです。

山岳地帯での人々の暮らしやカトマンズでの街の様子を実際に目の当たりにし、日本の環境衛生のありがたさを感じるとともに、宗教や価値観によって生活環境が大きく変化するのだと実感しました。そして、そのような環境が違う場所においても、人々の生活を支えていくものであるという看護の本質に違いはないことを実感しました。

一番心に残っていることは、障害のある体をアピールしてお金を募っている人々、観光客を目当てに物乞いをしている家族を見たことです。貧困の格差の拡大は、教育をはじめ、医療・福祉にも影響するものであることを痛感しました。

この経験から、看護観だけではなく、私自身の人間性を高めることの必要性、ノーマライゼーションの概念の本質について見直すことができました。

先生方はじめ、背中を後押ししてくれた家族や職場の先輩、温かく迎えいれてくださったネパールの方々、研修に参加させていただき、本当にありがとうございました。